

鞍馬山

長唄 全詞章

作詞者・作曲者不詳

そつきくらまかげ
夫れ月も鞍馬の影うとく、木の葉おどしの小夜嵐、物騒がしや貴船川、天狗だをしの夥しく、
まかいちまたおそ
魔界の巷ぞ恐ろしき

ここ
爰に源家の正統たる、牛若丸は

ちちあだへいけひと
父の仇、平家を一ト太刀恨まんと、夜毎詣づる多聞天、祈念の疲れ岩角に、暫しまどろむ肱枕

なさせ
〔回想〕思ひ出せば我未だ三才の時なりしが、母常盤の懷に抱へられ、伏見の里にて宗清が、
情によりて命助かり、出家をせよと当山の、東光坊へ預けられしを

かぞ
数へて見れば一ト昔、十余年の星霜経れば、稚心に忘れずして、今日のあたり見たる夢、

それにつけても父の仇

けんだうしゅげふ
剣道修業なすと雖も、我一向の生兵法、願へば神の恵にて、本望とぐる時節を待たん、イデヤ
たくま
琢磨の修業をなさん

きだち
木太刀かまへて身がまへなす

〔天狗〕時しも俄に風起り、天狗礫のばらばらと、鳴動なして凄まじし

はる
遙かの杉の梢より、又もや怪しの小天狗

きだち
木太刀うちふり立向へば

こぎか
シヤ小賢しと牛若丸

きだち
つけいる木太刀を払ひ退け

じやうだんげだん
上段下段

はたら
さそくの働き

しょうぶいか
勝負如何にと霧隠れ、うしろに伺ふ

そうじやうばう
僧正坊

まさ
勝り劣らぬ

りやうにん
兩人が木太刀の音は訝して、めざましくも亦勇ましし

てんぐ
さしもの天狗もあしらひ兼ね、跡をくらまし失せにけり、跡をくらまし失せにけり